

江戸期の漢学研究を物語る筆写本

『韓非子翼義』太田方撰

豊橋図書館 簡齋文庫子部・81 八冊

今回、貴重書として『韓非子翼義』を紹介する。この書は、『韓非子』に、江戸時代の漢学者太田方（号：全齋）が注釈をつけたもので、手書き筆写本ある。その貴重書たるゆえんを記してゆこう。

1. 著作としての優秀さ

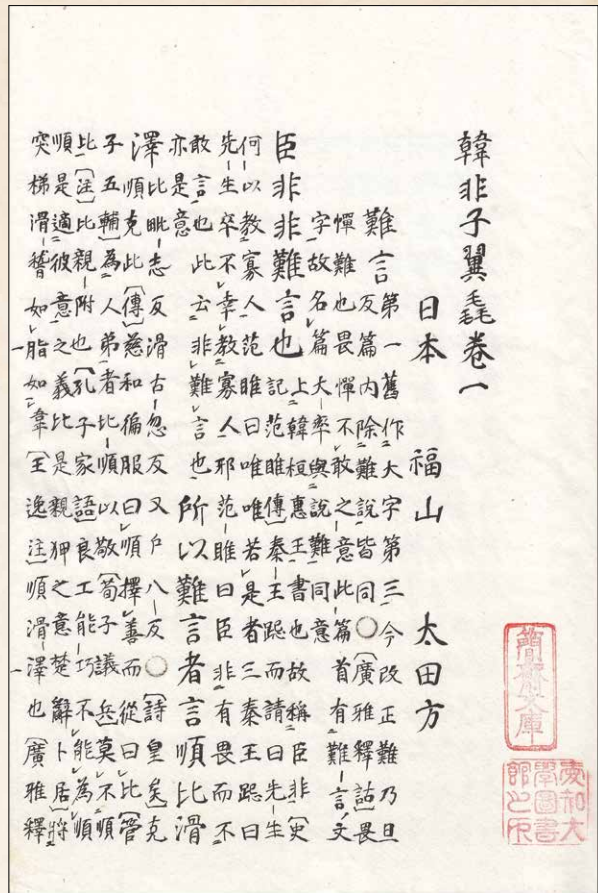
『韓非子』は中国古代、法家を代表する著作であるが、二千年近く昔の文章であり、正しく読むためには、古代中国の言語環境や言い回しを丁寧に調べてゆく必要がある。しかも『韓非子』は、その内容が思想的に政治体制と表面上相いれない要素があるために、研究が遅れていた。読みたいように読むのではなく、科学的に著者の意図を確定させてゆく手法は、中国では清朝に盛んになったが、実はそれに先駆けて江戸時代の文献学がそれを試みていた。この『韓非子翼義』は、その代表的成果である。古代中国の様々な文献を引き、用例を縦横に引きくらべているさまが、版面を見れば了解される。『韓非子翼義』は、優れた『韓非子』解釈書として、また江戸漢学最高峰の成果として高い価値を持つ。

2. エディションとしての優秀さ

『韓非子翼義』は、著者自身によって文化5年（1808年）に営利目的でなく木活字印刷された。著者個人が自ら活字を組んで印刷するには大きな困難があって、その苦勞は小説にもなっている。しかも彼の『韓非子』研究は活字本刊行によって完結したのではなく、その後も続けられた。ところが現在最も普及する漢文大系本は木活字本を底本としており、活字本刊行後の研究蓄積を収めていない。そんな中、この簡齋文庫本には、木活字本以後の、研究成果が著者によって補充されている。木活字本の書影も漢文大系本も容易に入手できるが、それらは著者の最終業績を反映しておらず最善本ではない。簡齋文庫本『韓非子翼義』は、最善注釈の最善本として高い価値を持つ。

3. 研究手法の画期をかたる資料として

上に記したように『韓非子翼義』は著者個人によって木活字印刷出版された。部数は20部程度で、それらの多くは、研究者仲間へ贈られたようである。そして贈った相手に対し、しつこく批判・指摘を乞う全齋の手紙が残っている。活字本印刷後も改定を続けた事と併せれば、彼が活字本を出した意図は、完成版を世に問うことではなく、研究の途中段階を示して研究者仲間から教示・指摘をもらうことであったと考えられる。自家



木活字に依る20部の副本作成は、この目的に最適な手段であった。このような研究状況と意図は、木活字本だけを見ても知られないことであり、簡齋文庫本の発見によって豁然明らかになった。このような研究手法は、完全な手書き時代には副本作成の困難ゆえに不可能であったし、明治以後は、学術雑誌の創刊や所謂活版印刷の普及によって失われた。江戸時代後期の漢学研究の手法、研究成果の刊行、校訂の有様を解明する手がかりとして、簡齋文庫本『韓非子翼義』は、高い価値を持つ。

4. 愛知大学にとっての意義

『韓非子翼義』は、簡齋文庫に収められている。この文庫は、愛知大学創立から間もない1948年に旧蔵者小倉正恒（号：簡齋）から愛知大学に移贈された善本に富む漢籍コレクションである。愛知大学前身の東亜同文書院大学は、敗戦によってほとんどの資産を失った。幸いに豊橋の軍隊跡に地を得ることができたが、学術資産はほぼ無きに等しかった。そのような状況のなかで簡齋文庫を受贈できたことは、大学の出発にあたって大きな幸いであった。簡齋文庫はおよそ3万冊の漢籍からなるが、『韓非子翼義』もその一冊として、愛知大学のスタートを担った貴重書である。

なお、この本全体の紙面画像が、国際問題研究所ホームページに公開されている。

<https://arcau.iri-project.org/detail/TL-2019-050?p=1>